Osaka University Knowledge Archive

Title	＜文献紹介＞ アルドー・ヴェントゥレッリ著 ニーチェにおける芸術、学問、歴史』Aldo Venturelli : Kunst, Wissenschaft und Geschichte bei Nietzsche, Monographien und Texte zur Nietzsche-Forschung, Bd .47, de Gruyter, 200
Author(s)	井西, 弘樹
Citation	メタフュシカ. 2012, 43, p. 123-129
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26495
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

《文献紹介》

アルドー・ヴェントゥレッリ著

『ニーチェにおける芸術、学問、歴史』

Aldo Venturelli: *Kunst, Wissenschaft und Geschichte bei Nietzsche*, Monographien und Texte zur Nietzsche-Forschung, Bd. 47, de Gruyter, 2003.

井西弘樹

本稿が紹介するのは、アルドー･ヴェントゥレッリのニーチェに関する論文集である。本書は、著者が過去に他の媒体に発表したニーチェに関する論文を加筆したものに、いくつかの論考を加えた上で、テーマ別に配列される形をとっている。第一部から第四部までには、それぞれ三章ずつ論考が収められており、扱われる主題は、ニーチェにおける芸術、学問、歴史という極めて広い範囲に及んでいる。それぞれの論考は互いに連関しあいながらも、基本的には内容的に独立しており、読者の興味の赴くままに読むことが可能である。本稿で著作の内容全体を紹介するのは紙幅の都合からも難しいので、以下では筆者にとってとりわけ興味深かった論考をいくつか紹介していきたいと思う。

ここで詳しい紹介に入る前に、本書のほぼ全ての論考に共通する方法論的な性格について一言述べておきたい。本書の際立った特徴は、ニーチェと他の哲学者たちとの思想的影響関係の考察にかなりの比重が置かれている点にある。著者は、ニーチェへのこうした哲学者たちの思想的影響関係を、著作や遺稿の緻密な分析から明らかにしている。したがって、本書は、ニーチェ思想それ自体の考察と、その淵源を探る歴史的、原典批判的考察という二つの側面を持っている。読者は本書の至る所で、思いがけない思想家の名前を見出すことになるだろう。

こうした方法論的な特徴を押さえた上で、本書の紹介に移ることとしたい。本稿が紹介するのは、芸術と学問の関係を主題とする第一部「音楽をするソクラテス。ニーチェにおける芸術と学問」（第一章から第三章）および、第八章「禁欲主義と力への意志。ニーチェのオイゲン・デューリングとの対決」である。第一部を構成する三つの論考は、三つの時代区分に従ってニーチェ思想における芸術と学問の関係を考察しており、ニーチェ思想の基本立場が他の思想家との影響関係のなかでどのように生成していったかを知る上で有益である。また、デューリングとニーチ

ェの関係を扱った第八章は、「禁欲主義」と「超人」のつながりを浮き彫りにすることに成功しており、本書の中で著者独自の観点が特に際立った論考となっている。以下、第一章において本書の第一部を、第二章において本書の第八章について紹介していくこととしたい。

第一章　ニーチェにおける芸術と学問

第一章「美学と認識の悲劇。『悲劇の誕生』の成立史のために」において著者は、遺稿を中心とした分析からニーチェの処女作である『悲劇の誕生』の成立過程に眼を向ける。『悲劇の誕生』の成立に際してニーチェが大きな影響を受けた人物として、ショーペンハウアーとヴァーグナーが挙げられることはほぼ常識と言っていいだろうが、著者はそこにエドゥアルト・フォン・ハルトマンの名前を加える。著者は、ニーチェの 1869 年秋の遺稿（『悲劇の誕生』の出版は 1872 年）にハルトマンの『無意識の哲学』の影響が色濃く現われていることを指摘し、こうした影響が『悲劇の誕生』の成立にとって決定的な役割を果たしたと指摘している。（S.18f.）[1]

このような影響の第一点目として、『無意識の哲学』第二部第五章「美的判断と芸術的産出における無意識的なもの」においてハルトマンがシェリングから受け継いだとされる職人芸（Handwerk）と芸術（Kunst）の区別が挙げられる。ハルトマンは職人芸を意識的な営みとみなすのに対し、芸術の産出を無意識的、本能的な営みとみなしている。芸術的天才が意図せずに生み出した芸術作品が最高の客観性を得るように思えるのは、芸術の創造がその本質において無意識的な営みだからである。（S.20）このような芸術創造における無意識的なものの介入と言う論点が、ハルトマンがニーチェに与えた影響とされ、その点はニーチェの遺稿から裏付けられる。（KSA7, S.23）

ハルトマンからニーチェへと継承されたとされる第二の点は、ニーチェの『悲劇の誕生』の準備草稿である「ディオニュソス的世界観」第四章において述べられる。そこにおいてニーチェは、ハルトマンの感情（Gefühl）を巡る考察を下敷きとして、感情はいかにして伝達されるかと言う問いを提起する。ここで重要なのは、ニーチェが感情を伝達するための手段として概念の有効性を限定的なものとみなしている点である。つまり、何らかの意識的表象によって感情を伝達することには限界があり、身振りと音楽こそが概念とは異なる形で、つまり無意識的な形で感情を伝達するとされる。（KSA1, S.572ff.）

芸術の産出における無意識的なものの関与という論点と、身振りと音楽による無意識的なもの（感情）の伝達という論点のそれぞれは、『悲劇の誕生』における悲劇芸術の産出過程および、そこで産出された音楽の特性として統合される。悲劇芸術の産出において、叙情詩人は概念的思考からではなく、音楽的気分から出発すると共に、そこで産出された音楽および悲劇芸術は、無意識的なもの、概念的把握を越え出たものを伝達するのである。

悲劇芸術の体験は、観衆を概念的認識の及ばない生の根源（ディオニュソス的なもの）へと誘

---

[1] 本書からの引用はページ数のみを、ニーチェからの引用は全集（KSA）の巻数とページ数によって表すこととする。*Friedrich Nietzsche: Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe*, hg. von G. Colli und M. Montinari, Berlin, München, de Gruyter, 1980.

うと同時に、そうした陶酔状態をアポロン的仮象という認識のヴェールに包むことによって、認識が本来持つ仮象性を観衆に対し明らかにする。ギリシア神話とは本来、このようなディオニュソス的真理を「象徴」するものであって、歴史的次元ではなく形而上学的次元においてこそ、その真の意味が理解される。著者によれば、このような悲劇芸術の体験を通じた神話の持つ象徴性の復活こそが、「若きニーチェの考察の最も独創的な観点」とみなされる。(S.48)

このように、『悲劇の誕生』においてニーチェが形而上学の立場に立っていることは明らかである。しかし、第二章「真理の迷宮。『悲劇の誕生』完成以降の言語批判と自然科学」において著者は、既に『悲劇の誕生』の時期からニーチェは自らの形而上学的立場に懐疑的な姿勢を見せていたことを指摘する。この点は、ニーチェの遺稿作品の中でも極めて重要なものとされる「道徳外の意味における真理と虚偽について」(以下、「道徳外」)(1873 年)の研究を中心として、既にニーチェ研究にとっては常識的な見解となっており、それ自体目新しいものではないが、著者はそうしたニーチェの反形而上学的立場に関して、他の遺稿をも含めたより広い観点から考察を行っている。

著者は、ニーチェの反形而上学的立場に決定的な影響を与えた人物として、アフリカン・シュピールの名前を挙げる。(S.69ff.) シュピールは、物自体が思考されることそれ自体を背理とみなし、結局のところ物自体とは、認識の形式の内部で思考された経験的対象に過ぎないことを指摘することによって、表象以外の何者かを仮定するような思考を排除しようとした人物とされる。こうした考えのニーチェへの影響は、「道徳外」と同時期の遺稿作品である「ギリシア人の悲劇時代の哲学」15 節におけるシュピールの『思惟と現実』からの長大な引用から推測される。とりわけ、シュピールの思想は、物自体のような超越的な対象に対する「多様な現実性やその絶えざる運動の知覚における諸感覚の優位性」を主張するものであり、ニーチェの反形而上学的な転回において決定的な影響を与えたとされる。

しかし、こうしたニーチェの反形而上学的立場の立証は、『悲劇の誕生』での世界を形而上学的な主体の芸術的営みとみなし、人間の生や認識をそうした主体の芸術作品とみなすような考えを失わせるものではあっても、人間の認識そのものの芸術性を否定するものではない。なぜなら、人間の認識そのものが持つ芸術的性格は、形而上学的基礎付けとは別の「生理学的」な基礎付けを得たからであり、それは「道徳外」および遺稿から確認される。(S.60)

また、こうしたニーチェの反形而上学的傾向は、あくまで「一貫して特定の諸前提から導き出された仮説」の枠を超えるものではなく、ニーチェの中期思想の始まりを告げる『人間的、あまりに人間的』における決定的な反形而上学的転回を迎えるまでは、あくまで潜在的なものであったことを忘れてはならないとされる。(S.78f.)

第一部の最後を飾る第三章「ツァラトゥストラとアフォリズムの精神」においては、ニーチェの後期思想の始まりと目される『ツァラトゥストラはこう言った』(以下、『ツァラトゥストラ』)における芸術と学問の関係が論じられる。本章は前半と後半に分かれており、前半部では『ツァラトゥストラ』の哲学的背景の考察が、後半部では『ツァラトゥストラ』という作品の文学的形式およびその成立についての文献学的考察がなされる。

前半部で著者は、『ツァラトゥストラ』の核心である永遠回帰思想が初めて表された有名なニーチェの遺稿（KSA9, S.494ff.）の分析を行っている。この遺稿は、永遠回帰を主題とする 5 つの点に分けられた著作の構想である。ニーチェはその 4 番目の段階に関し、「無頓着の哲学 Philosophie der Gleichgültigkeit」という表題のもとに長いコメンタールを付している。ここで著者は、この「無頓着の哲学」に関して、アフリカン・シュピールやヴィルヘルム・ルーなどの影響関係を視野に入れながら詳細な分析を行っている。

ここでは、紙幅の都合から、「無頓着の哲学」の主体である「実験としての単独者」に関する興味深い考察を紹介するだけに留めたい。無頓着とは、学問的精神の基盤であり、事物の非党派的な認識を可能にする精神のありかたである。つまり、それは自らの個人的な顧慮や快不快といったものに無頓着であることで、事物をそのあるがままに認識しようとする態度であり、ニーチェはそれを情熱にまで高めること（認識の情熱）を主張している。（S.90f.）

しかし、事物をそのあるがままに認識するとは、真理が客観的なものとしてどこかに存在し、それを認識するといった風に理解されてはならない。むしろ事物をそのあるがままに認識するとは、個人が自らの狭隘な視座を乗り越えていくことによって、初めて実現されるものである。「一人の人間が自分のうちにもっている個人の数が多いほど、彼が自分で真理を見出す見込みは高いであろう。」（KSA9, S.483）つまり、より多くの個人の視点を自らのうちに取り込むことこそが、「真理」へと至る道であり、そうした「何百もの眼から、たくさんの個人を通して見ることのできる」（KSA9, S.466）個人への努力こそが、認識の情熱を抱くにふさわしい人物になるための実験（Experiment）なのである。（S.93）ニーチェの思い描く単独者が、多数の個人であるような個人という極めて逆説的な性格を有することへの著者の指摘は、『ツァラトゥストラ』の時期のニーチェの学問観を論じる上で示唆に富むものであると言える。また、著者は、この多様な可能的真理の間での闘争こそが認識の質を高めるという思考に、学問や「真理」のもつ創造的性格を認めており、ここに学問と芸術の関係の新たな展開が見出されると言える。

以上が、非常に大雑把ではあるが、第一部において描かれたニーチェ思想の芸術と学問の関係を巡る論点の素描である。

第二章　ニーチェとデューリング

第八章「禁欲主義と力への意志。ニーチェのオイゲン・デューリングとの対決」の冒頭で著者は、ニーチェとオイゲン・デューリングの関係について総括しているが、そのなかでも重要とされるのが、1875 年にニーチェが書き残したデューリングの『生の価値』に関する長大なコメンタールおよび『ツァラトゥストラ』第二部におけるデューリング批判である。この論考における著者の主張の核心は、この二つの異なる時期におけるニーチェのデューリング批判が、禁欲主義（Asketentum）を主題とする点において一致すると言う点にある。

著者は、1875 年のコメンタールにおいてニーチェが禁欲主義に肯定的な判断を下している点に注目している。デューリングが禁欲主義を、生の価値の源泉である情熱を消滅させる単なるエゴイズムとみなしているのに対し、ニーチェにとって禁欲主義とはむしろ「普遍的に有用かつ全

ての者にとって有益な情念」として、「人間のあいだでの高次の絆」を創出するものであり、エゴイズムを超越して、人類全体を視野に入れるような精神のあり方につながるものとみなされる。（KSA8, S.139）

このような「人類の総体的意識」を代弁する点に、禁欲主義の第一の特徴があるとするならば、その第二の特徴は、「復讐の精神からの救済」という観点において見出される。（S.217ff.）遺稿においてニーチェは、自己認識を自己への公正さから生ずるものとみなすと共に、そうした公正さを復讐感情とみなしている[2]。（KSA8, S.180）つまり、自己自身を公正にみつめようとする姿勢は、自らの醜さや誤謬を誠実に見つめようとする試みである限り、自己自身への敵対的態度を前提とする。こうした姿勢は、『人間的、あまりに人間的』へと連なる人間の判断形式そのものがもつ誤謬的性格の認識に至る。（KSA8, S.135f.）

ニーチェによれば、禁欲主義もまた、このような自己への復讐をその本質とするが、一方で、こうした自己への復讐からの救済という契機をも含んでいるとされ、それが「愛 Liebe」や「自己恩赦 Selbstbegnadigung」という言葉で語られる。ここでは、自己認識による自己軽蔑から、そうした自己軽蔑を克服するようなエゴイズムから純化された自己愛への移行が論じられ、それをニーチェは、「私の福音 mein Evangelium」と呼んでいる。（KSA8, S.180）この自己認識による自己への復讐から愛による自己救済というプロセスは本来個人が自らの内で達成するものであるが、この点を見誤り、そうした愛を自己とは別の存在、つまり神の恩寵とみなす点にキリスト教の本質があるとされる[3]。

上述のように、デューリングへの批判を基礎とするニーチェの禁欲主義理解は、禁欲主義の本質を人類の総体的性格を代弁すると共に、自己への復讐およびそこからの救済を実現する点に見出している。著者は、こうした禁欲主義者の特徴が『人間的』における「自由精神」という理想像の形成に大きな影響を与えたと指摘する。（S.216）

本章において最も重要な指摘は、こうしたデューリングとの対決が、『ツァラトゥストラ』をめぐる思想圏において再び見出される点にある。とりわけ重要なのは『ツァラトゥストラ』と同時期の遺稿における道徳と人類の目標に関する異なる二つの解釈の対比である。（KSA10,

---

2 この点はデューリングの正義の起源を報復衝動にみる論点とつながるものであり、第八章の後半で詳しく論じられることとなる。（S.228ff.）

3 ここで論じられた自己への復讐感情の愛による克服というモチーフは興味深いものであるが、なぜそうしたことが実現できるのかについて、ニーチェのここでの論述のみから理解するのは困難であり、また著者も十分な説明を行ってはいない。しかし、著者がページ数を指摘するに留めているいくつかの遺稿及び著作がこの点を理解する上での手がかりになるように思われる。とりわけ重要なのは、「頭脳の判断としての軽蔑と心の衝動としての愛」が並存可能であるとする遺稿における記述である。（KSA8, S.323）ここでは、愛とは一種の衝動であり、そうした自己自身を肯定する傾向性は、どれほど知性において否定しようとも、消滅することはないとみなされている。「人間の愛とは頭脳の事柄では決してあり得ないので、人間は自らを愛することをやめることは決してできない。」（同）このような自己軽蔑の只中にあってそれを乗り越えていくような愛は、「自己への喜び、自己の力への満足」として、人間自身に内在する衝動や力の感情に深く結びつくものである。（KSA2, S.128f.）こうしたニーチェの人間理解は、人間を唯一つの方向性のみを持つ存在ではなく、矛盾する方向性の複合体とみなす理解へとつながるものである。デューリングの『生の価値』へのコメンタールが以下の文章で締めくくられているのがその証拠である。「人間とは多くの存在者の複合体であり、一方が他方へと目を向けることの出来るような複数の領野の統一であるように思われる。」（KSA8, S.181）

S.244f.）この遺稿において、ニーチェは、自己超克を通じて「超人」を生み出す方向性と、人間の平等化、平均化による「末人」が生み出される方向性が、互いに併存することの必要性を主張すると共に、平均化への方向性を持つ人物としてデューリングの名前を挙げている。人間の平均化が種属の保持に役立つものとされ、そうした種属の保持が十分に確保されることを前提としたうえで、「人間」という種属そのものを超越していくような超人への試みが目指されねばならないとされる。この遺稿には、はっきりと超人は末人の支配者と解釈されてはならないと述べられており、ニーチェにとって超人が政治的な支配者やカリスマとは全く別の理想像であったことが理解される。

著者は、この遺稿におけるすべてを平均化することを目指す平等主義と、対立の先鋭化を通じた自己超克という二つの方向性が、『ツァラトゥストラ』第二部「タランチュラについて」に反映されていることを指摘するとともに、そこで述べられる「平等の説教者」こそ、デューリングを想定したものであると主張している。（S.222）なぜなら、この章の準備草稿において、「平等の説教者」のことを指す「生の告知者」は、『生の価値』の著者デューリングを暗示するとともに、その思想の基本テーゼである「正義を復讐および平等性への意志と解釈する」者を意味するからである。

デューリングを暗示する「平等の説教者」は「今現在力を持つ者」から力を奪うことを目指すとされるが、著者はここで力を持つとみなされた者こそ、デューリングが敵対視した禁欲主義者であるという大胆な解釈を行なっている。（S.223）準備草稿において「生の告知者」が敵対するのは、「生に背く者たち」であり、こうした者たちは「生の告知者」より強大な力と純粋な心情を持つとされるが、著者はこれらを「復讐からの救済」へ至るための禁欲主義者の特徴と解釈している。つまり、ここにおいてもまたデューリングの平等主義に対して禁欲主義が対置されるという 1875 年の遺稿における構図が再現されている。

この点を念頭に置いた上で、先程の超人を扱った遺稿を再度考察するならば、人間の平等化を目指す方向性にデューリングが該当するのに対し、超人を目指す方向性に禁欲主義が位置づけられることとなる。つまり、禁欲主義こそ、ニーチェの目指す超人への自己超克の過程において必須の前提となる。そして『道徳の系譜』第三論文における禁欲主義者の道徳の自己止揚の過程こそ、そうした主張の裏付けとみなされる。

1875 年のコメンタールにあった論点と同様に、著者は、このような道徳の自己止揚への過程が禁欲主義における「自己への復讐、ルサンチマン」を契機とする一方で、そうした自己への復讐から自らを救済する方向性をも禁欲主義が持つことを指摘しているが、この点は議論が不十分と言わざるを得ない。著者は「真理への意志」を問題視するまでに認識を推し進めた禁欲主義者が、ルサンチマンを克服する「最高の肯定の状態」へ至ると述べているが、その過程に関しての説明はほとんどなされていない。（S.225f.）したがって、なぜ禁欲主義者が自己への復讐から解き放たれうるのかという論点を、後期ニーチェ思想の文脈に即して解釈することが課題として残されたと言える。しかし、ここで述べられた禁欲主義をめぐるデューリングとニーチェの関係の図式は、超人をめぐる思想を理解する上で重要な示唆を与えるものであることは間違いない。

以上が本書の紹介である。本稿では、その一部を紹介したのみであるが、そこからだけでも、ニーチェ思想のもつ多彩な側面が垣間見えたように思われる。本書は、ニーチェ思想の多様な展開を、著者による膨大な研究資料との取り組みの賜物として、読者に開示してくれる。本稿で紹介できたのはそうした成果のほんの一部分であり、他の論考もまた、興味深い論点を提出しつつ、ニーチェ思想の地下水脈を示すことに成功している。だが一方で、本書は論文集と言う性格から、それぞれの論点が簡潔に示されるだけで十分に展開し切れていない部分も多くあるように思われた。本書は、ニーチェを研究する上で、読者の関心領域を大幅に広げることに寄与するとともに、それぞれの考察対象へのきっかけを与えてくれる書物として読まれるべきものであるだろう。

（いにしひろき　現代思想文化学・博士後期課程）